

令和4年度 研究大会

令和4年度第25回研究大会を、令和4年12月6日に春日市クローバープラザにて開催いたしました。今回は参集とオンラインのハイブリッド開催となりました。

第25回大会テーマ

「あなたが学校事務職員という仕事を通して、叶えたいことは何か？」

～そのために何ができるのか、考え行動しよう～

1 開会行事

○ 会長あいさつ

みなさまこんにちは。

福岡県小中特別支援学校事務職員研究会会長の吉備と申します。第25回研究大会の開催にあたり、主催者を代表いたしまして一言ご挨拶申し上げます。

これまで、その時々課題に真摯に取り組み、試行錯誤を重ね、日々奮闘されている事務職員のみなさまに心より敬意を表します。

また、当研究会活動に日頃よりご支援・ご協力いただいております、福岡県教育委員会、福岡市・北九州市両政令市をはじめとする県内各市町村教育委員会及び教育関係機関、小学校及び中学校校長会や県教職員互助会等教育関係諸団体の皆様に厚く感謝申し上げます。本日もお忙しい中、おいでいただいております。誠にありがとうございます。

さて、本研究会におきましては、一昨年

2月に設立20周年記念大会を開催いたしました。その後、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、一昨年度は研究大会を中止、そして昨年度はオンラインのみでの研究大会を開催しました。この間、どのように研究会活動を推進するかについて大変苦慮してまいりました。

本年度は、参集して論議することの重要性を再確認し、人数制限は設けるものの参集の形の復活、そしてオンラインを併用することでより多くの方に参加していただきたいという思いで研究大会を企画しました。本日はここクローバープラザに参集、オンライン参加者を含め、400人弱の方の参加を得て開催いたします。

大会テーマ等についてはこの後研究部長から詳しい説明がありますのでそちらに譲ることとし、私からは、少し違ったお話をさせていただきますと思います。

みなさんは学校現場において、最近、数々の技術革新が進んでいることを感じておられることと思います。

技術革新とえば、本日寝不足の方もきっとおられると思いますが、サッカーワールドカップにおいて注目を集めているVAR（ビデオ・アシスタント・レフリー）というテクノロジーは、伝統あるサッカーの世界を大きく変えていると思います。

また、日本のプロ野球においても、試合中にビデオ判定を監督が求めるリクエスト制度を活用している場面を見かけることも珍しくなくな

りました。その他、テニスやバレーをはじめ数多くの競技にビデオ判定という制度が取り入れられています。これらは審判等の判断を補完又は検証といった形で取り入れられています。人では難しいことをテクノロジーの進化で正確性、確実性を上げようとしており、長年続いている皆が知っているような競技であったとしても、大きな変化が起こっています。

さて、教育現場ではどうでしょうか。国は、目指すべき未来社会像として「Society 5.0」の実現に向け動き出しています。それに関連し、「学習指導要領改訂」、「GIGAスクール構想」、「令和の日本型学校教育」などが次々と打ち出され、新型コロナウイルスの感染拡大も重なり、1人1台端末整備は前倒しで進められました。さらに、DX（デジタルトランスフォーメーション）、SDGs（持続可能な開発目標）なども決して教育現場とは無関係ではありません。私たちの職務にもその影響は確実に出てきています。

すでに福岡市においては事務センターの機能を持つ共同学校事務室が、北九州市においては教育総務事務センターが給与関係の諸手続きを大きく変えています。県域においても、給与事務についてクラウドの活用等大きな変化が見込まれています。

また、電子決済や領収書・請求書の電子化、電子マネーの普及など財務関係についても大きな変化が予想されます。

先ほどのスポーツの話ではありませんが、私たち事務職員の仕事内容は10年後、いや5年後、3年後、ひょっとすればもっと早く大きく変わっていくことでしょう。

私たちが行っている職務のうち、県費や市町村費に代表される定型的業務にはれっきとした正解があります。もちろん簡単に正解にたどり着けないことも多数あります。しかし正解があるという分野は、AIが最も得意とする分野です。

当面の変革では一時的に現場に負荷がかかることはあるでしょうが、そう遠くない将来、いわゆる定型的業務の多くが私たちの手から離れていく、もしくは効率化が大きく進んでいくことは容易に想像できます。また、働き方改革の側面からもそうならなければならないと思います。そこには大きな可能性があると共に、何も考えずに受け身でいることに大きな危機感というものも感じざるを得ません。

私たちが「事務をつかさどる」ために、単なる事務処理ではなく、立案・調整・判断が求められる、企画・提案・問題解決型の事務職員へ「仕事の質の変化」が必要とされています。解決方法が書かれていない、言い換えれば正解がわからない状況に対応するため、その分野を苦手とするAIより、人の力が必要となる場面が必ずあります。

しかし、では具体的にどうしたらいいのか。それを研修する場を担うのが事務研の役割ではないかと考えます。本研究大会では主にこの非定型的業務の取り組みを考えることが中心となります。事務職員の専門性を活かし、研究集録93ページにあります「とびうめマップ」に謳う“子どもの豊かな育ち”にどう繋げていくか、それを様々なアプローチを通してみんなで考えていく。各分科会での気付きをもとに事務職員のあり方について、そして明日からの実践について決して“他人事”ではなく“わがこと”として考えていきたいと思えます。

ウイズコロナという時代における研究の在り方、取り組み方についてもまだまだ模索が続きます。ぜひおひとりおひとりが、少し大げさに言えば自らの実践や創意工夫をインフルエンサーとして発信し、それが多くの論議や検証に結び付き、さらに改善していく。理想かもしれませんが、そうした好循環につながってほしいと思えます。

本日の研究大会の中から、そこにつながるヒ

ントをみなさまに見つけていただき、併せて、事務職員の“つながり”“志”というものを少しでも体感し、明日へのモチベーションへとつないでいただけることをご期待申し上げ、私からの挨拶といたします。本日はよろしくお願いたします。



2 分科会

○ 第1分科会

「学校事務職員としての接遇力」

～学校と保護者・地域との架け橋を目指して～
講師

ナラティブ・コミュニケーション教育研究所
所長 佐藤 敬子氏

第1分科会では、事務職員の研修であり重視されてこなかった「接遇力」を学び、保護者や地域、学校に携わる方々との円滑なコミュニケーションや信頼関係を築くことを目的とし、講師を招聘して研修を行いました。

研修の序盤では、接客と接遇の違いについて学校の事例を取り入れながら、講演をしていただきました。ときおり、講師から参加者へ質問をされたり、事例を挙げた際には回答を求めたりする場面も見られ、聞くだけではない双方向参加型の研修として進んでいきました。

中盤では、一般的なマナー講座も織り交ぜながら、相手に与える印象を良くする方法を学び、終盤では、クレームについての考え方やクレー

ムにならないための対応等を教えていただき、日常の業務に活かせる講演を聞くことができました。

講演の中で、「保護者や地域は、事務職員を選ぶことができない。接遇力を身に着けた事務職員がいる学校は、事務職員と保護者の信頼関係ができています。また、人でなければできない働き方をしてほしい。AIは賢いが、答えのない問いには答えることができません。相手を思う気持ちや思いやる想像力が児童・生徒に影響を与え、学校全体・地域を良くする」との助言をいただきました。

講師が教育行政に携われた間に経験された学校内で起きる事例に共感し、そこから学ぶことができ大変充実した研修となりました。本分科会が有意義なものになったのも参加者の皆様、多くの関係者のお力添えのお陰です。心よりお礼申し上げます。



担当研究部員

大川市立川口小学校	衛藤 旭秀
小郡市立小郡小学校	中島 あゆみ
田川市立金川小学校	原田 健吾
那珂川市立安德小学校	阿部 容子
福岡市立三筑小学校	井上 僚太
宗像市立吉武小学校	領家 未貴

○ 第2分科会

「わたしの叶えたい夢」

～子どもたちの明るい未来をつくる実践に学ぶ～

講師 埼玉県川口市立青木中学校

事務主査 柳澤 靖明氏

第2分科会では、「わたしの叶えたい夢～子どもたちの明るい未来をつくる実践に学ぶ～」と題して、講師に柳澤靖明氏をお迎えし、教育費への関わりを通して課題の解決や現状の改善を分科会参加者全員が考える場とし、子どもたちの明るい未来をつくる実践に繋げる分科会としました。

分科会の流れとしては、講師主体となって、分科会メンバーが考えた質問を基に参加者にも投げかけながら会場全体を巻き込んで意見交換を行い進行していきました。柳澤先生が質問の内容を広げさまざまな意見を拾ってくださったおかげで、沢山の方に発言していただき活発な意見交換ができました。柳澤先生はただ自分の意見を述べるのではなく、憲法や法律に基いた根拠などを示しながらお話してくださったのでとても説得力があり、学びになる内容ばかりでした。また、オンラインでは意見交換に参加せずに視聴のみでの参加となりましたが、会場の盛り上がっている様子を多くの方に伝えることができました。参加者はワークシートを記入し、自分の学校の課題と向き合い、最後の「私の行動宣言」まで考えることができ、明日からの実践に繋がる良い機会となったと思います。

この分科会は、原稿がほとんどなく、分科会がどのように進行していくかわからない状況の中、当日まで変更点があり、不安な要素が沢山ありました。講師交渉から開催方法等分科会メンバーで話し合っただけで決断しなくてはならない場面がありましたが、担当毎に責任を持ち、色々な方に助けをいただきヒントを得ていく中で、当日は臨機応変な対応を取ることができました。

分科会を運営するにあたって、「叶えたい夢」や課題について試行錯誤していく中、また柳澤先生との交流の中で自分自身の意識の変化や可能性が広がりました。この機会ですべきものを学校に持ち帰り、還元していきたいと思っております。関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



担当研究部員

桂川町立桂川東小学校	作本 彩華
小竹町立小竹西小学校	永末 裕太郎
大野城市立大野南小学校	迎 弦武
豊前市立千束小学校	宇津 香織
大牟田市立白光中学校	前田 恵宏
大野城市立御陵中学校	堤 彩永

○ 第3分科会

「安心・安全な学校づくり」

～事務職員ができる防災対策について考えよう～

講師

嘉麻市防災対策課

防災係長

藤崎 寛允 氏

嘉麻市立上山田小学校

事務主幹 (防災士)

綾部 貴美子 氏

私たち第3分科会は、「安心・安全な学校づくり～事務職員ができる防災対策について考えよ

う～」というテーマで、現地参加とオンライン参加のハイブリッド型で研究発表を実施しました。

前半は、分科会メンバーで作成した学校備品チェックリストと各自治体の防災対策への取組の紹介、そして学校事務職員で防災士の資格をお持ちの、嘉麻市立上山田小学校主幹・綾部貴美子さんへの対談形式のインタビューを行いました。

後半は、嘉麻市防災対策課防災係長・藤崎寛允さんの講演、そして各班でのテーマに沿ったグループワークといった流れで、事務職員が出来る防災対策について考えていきました。

オンラインとのハイブリッド型にしたことで、様々な機材トラブルがありました。研究大会当日に忙しかった方でも参加ができ、多くの参加者に参加いただけたので良かったと思います。中でも特に盛り上がったのが後半のグループワークでした。各班4～5名でグループを作り、

- ① 「お互いの学校や自治体の現状についての紹介」
- ② 「分科会を通しての気づきや、学校の防災対策のために実際に行動してみようと思ったことについて」

2つのトークテーマを基に20分強話し合い、最後に3つのグループの代表者が各テーマで話し合ったことについて発表するといった流れでした。各自治体・学校の防災に対する取り組みの情報交換や、事務職員としてできる防災対策の意見交換が積極的に行われました。また、講師として招聘していた藤崎さんや綾部さん、研究部員も各グループでの話し合いを聞き、その場にいた全員が、学校事務職員が出来る防災対策についてより深く考え、新たな気づきを生み出し、更なる防災意識の向上と実践に繋がったと思います。

第3分科会に携わっていただいた皆様、あり

がございました。皆様のおかげで参加者にとっても研究部員にとっても、良い分科会となったことをここに報告します。



担当研究部員

北九州市立若園小学校	吉見 藍人
久留米市立筑邦西中学校	森永 梨沙
行橋市立行橋小学校	成田 寿朗
須恵町立須恵第一小学校	石川 健一郎
柳川市立両開小学校	古賀 友喜
みやま市立山川中学校	西原 千夏

令和4年度 研究活動報告

今年度は、1名欠員の19名、そのうち新規研究部員が14名というメンバーで研究部がスタートした。相変わらず新型コロナウイルス感染症による感染防止の対策として、オンラインを併用した会議が続いた。

初めて研究大会の分科会運営を経験する者が多いため、どのような業務がどの程度あるのか、どのようなスケジュールで進めていくのか、分科会の内容を個人また分科会グループでどのように深めていくのか等、全てにおいて悩みながら行っていった。このような分科会の内容深化をどのように進めていくのかという課題とともに、5月に初顔合わせをし、約7ヶ月後

の12月上旬に研究大会の開催という準備期間の短さと、オンラインを併用したハイブリッドによる分科会運営という課題があった。

加えて、講師選定と講師との打ち合わせにも苦勞した。講師選定では、分科会テーマに合う講師を探したが予算との折り合いがつかずに苦勞した分科会や、新型コロナウイルス感染症の関係で講師依頼を断られる分科会等があった。講師が決定した後も、講師との打ち合わせにおいて、講師に分科会の参加者へ伝えて欲しいことを上手く伝えられない、何を学びたいのかという講師の問いに答えられない分科会があった。しかしそれらを経験したことで、何度も分科会のメンバーで勉強をする機会を得ることが出来た。講師と会話出来るように本を読んで知識を深めることや自分の考えを相手に話し伝えること、メンバーの意見を聞いてまとめていくこと、想いを文字に表し文章を書きあげること、それらの文章をパワーポイントのスライドに分かり易くコンパクトにまとめること等、準備の段階で様々な経験を重ねることができた。

課題は沢山あったが、大会参加者のアンケートを見ると、9割以上の参加者に満足いただくことができた。当日も、当初予定の変更やトラブルの対応が続いたが、7カ月の間に培ってきたメンバー同士の信頼関係により、臨機応変に乗り越えられた箇所が随所に見られた。

現在私たち事務職員には、学校事務の適正化・効率化に加え、教員の事務負担軽減、さらには総務・財務等の専門性を生かして学校の事務を一定の責任をもって自己の担任事項として処理しより主体的・積極的に校務運営に参画する、事務を「つかさどる」ことが求められている。今年度、研究部員が苦勞してたどってきた軌跡は、このつかさどる事務職員に必要な要素が含まれている。自分自身と他者の知識を合わせ、自分達の責任事項として判断し決定していく。意見の交換は、主体的・積極的な分科会運

営への参画である。

研究大会の各分科会においても、参加者は講師から知識を得て、分科会参加者同士や講師とのやり取りで意見を交換し、自分自身の中で何かしらの方向性や物事を判断する礎となる答えが見つけれられたのではないだろうか。

今年度の大会テーマである「あなたが学校事務職員という仕事を通して、叶えたいことは何か?～そのために何ができるのか、考え行動しよう～」は、研究部員が学び考えてきた事であった。研究大会を開催するコンセプトである、福岡県の事務職員の学びを止めないためにも、日々進化していく福事研研究部でありたい。

研究部長 樋口 桂子



編集後記

ようやくこの日を迎えることができました。3年ぶりに参集しての研究大会の開催となりました。

予定では研究大会当日の「大会テーマの設定について」を掲載する予定でしたが、都合により「研究活動報告」に変更となりました。

